

親族であり、アドナン・ハイラッラーの母方の従兄弟であるサッダーム・フセインはこの新治安機関の議長就任により、他の治安機関ばかりでなく軍事局をも支配する強力な権限を得た。この機関を介して、軍内部での彼の影響力が増大した。この軍内部での影響力の増大は、サッダーム・フセインが文民で軍内部で権力をもたなかったため非常に重要であった。そしてオウジャ、ティクリート、ドゥール、アナ、ラマディ、モースルなどを初めとするいわゆる「スンナ派三角地域」から、近親者、子買いの手下、取り巻きなどをかき集めたのである。

フセインは、次第に古参軍人をパージしたり政治的に中立化させた。また彼は、中枢への昇進過程で大統領の権限増大を図り、例えば、1968年に党将校が独占していた RCCを1970年に再編して RCCの拡大と地域指導部に文民を入れることを巧妙に行った。これらの変化は支配エリートに強力な凝集力の源泉を与え、軍の力を削ぎ、軍を兵舎に戻す道を開いた。

2. 血縁集団と党

1950年代にシーア派の中産階級知識人がバアス党のアラブ民族主義/社会主義イデオロギーに賛成していたことは、良く知られている。1958年革命の初期の数ヶ月間に、バアス党は党員を数百から数千に増やした。1958年の書記長フアド・アル=リカービはシーア派で、1963年の地域指導部文民メンバー8名の内の6名もシーア派であった。しかし1963年の党内分裂を契機としてバアス党におけるシーア派優位が終わり、1968年直前にはバアス党に新しいベジャート/ティクラーティ/サーマッラーイのチームが誕生した。主な人物はハーリク・アル=サーマッラーイ、サイード・アブドゥル・バーキー (ティクリート生まれのハディース地縁閥) などだが、これら党文民派は少数であった。一方で党軍事派においてはベジャート/ティクリート集団の勢力が一層顕著で、1968年の最初の RCCでは7人の内の3人がベジャート/ティクリート集団であり、その次のRCCでも15人の内の6人がそうであった。

こうした血縁集団を基本とする党の構成により、各種機関に血縁集団が起用されるようになった。それに並行して党員数も急速に増え、1968年には党員数は10～150 (500から600との説もある) 人であったが、1976年には正式党員が10000人、一般党員 (党員養成過程にいるものも含む) が50000人であった。八年間で百倍増えたことになる。三年後、一般党員は25倍増以上になっていた。正式党員は25000人まで増え、その他のクラスの党員は150万人に増えていた。さまざまな階級、社会単位、地域社会の構成員は党のヒエラルキーを介して上方移動、社会政治参加のルートを

表5 最近のバース党地域指導部構成要素の変化 (単位:人)

	スンナ派	シーア派	キリスト教徒	ベジャート	ベジャート同盟	モースル
第九回指導部(82年)	8	6	1	3	1	1
第十回(91年)	13	3	1	5	6	2
第十一回(95年)	12	4	1	3	5	2

(出所: 図1に同じ)

求めた。シーア派の一部や不遇を託ち疎外されていた地域の住民は、党機関を通して中央進出が可能となった。例えば1985年の推定では、将校の20%、閣僚職と地域指導部職の25%がシーア派だった。第一期～第三期国会(1980～90年)の議員のうち、平均40%がシーア派であったが、一方クルド人やキリスト教徒は象徴的な数の存在でしかなかった。

バース党は、第七回(1968年11月)、第八回(1974年1月)、第九回(1982年6月)、第十回(1991年9月)、第十一回(1995年7月)の計五回、地域指導部大会を開催したが、最高権力機構としての地域指導部は常時再編された。第九、第十、第十一回の地域指導部大会は指導部構成員の出自の観点から、特に注目する価値がある。表5からは、シーア派の勢力の低下、スンナ派の勢力の増大、ベジャートとその部族同盟の勢力の大幅な拡大が明らかである。この傾向は湾岸戦争以前に始まったが、湾岸戦争後の混乱の中で、特に一族/国家内の内部権力闘争の中で強まっている。

3. 血縁集団と軍

バース党が権力の座に就いた初期には、国家統制機関としての軍を誰が支配するかという問題があった。軍は体制の保護者になり得るとともに訴追者にもなり得る。第八回バース党大会の報告は一節全部を費やして軍に関する議論を展開しているが、そこでは過去の経験が回顧され、「腐敗した軍特権階級」の支配として前の独裁/軍事体制を厳しく非難している。

またそれ以前の1974年第七回党大会では、党は達成すべき目標を二つ掲げている。

a. 軍を党の支配下に置き、「(党への忠誠に)疑いが持たれるような謀略的冒険主義的分子を排除し、兵士を完全に教化すること。一言で言うとな軍をバース党化する、あるいは、公式用語で言うと、「教化された軍」を造ること。(135～6ページ)

b. 軍を再編し、近代化し、増強すること。(136ページ)

また報告では述べられていないが、もう一つの目標として指令・統治系統の中樞を

血縁ネットワークの掌握下におくことが指摘された。

第一の目標の特徴は、軍将校の政治的役割の段階的な低下であり、十年間にわたり政治に強く関与してきた軍を本来の国防業務に戻すことである。第二の目標は、軍の規模の途轍もない拡大であり、軍と総人口の比において、治安/軍の力が無敵になることである。また、軍に新しい機構を作って二元性を持たせた。この変更を明確にするため、以下に四つの図を比較して、カーシム (1958～63年、図A)、アーリフ (1963～8年、図B)、バアス党 (1991年、図C,D) の三代における軍の構成を見てみよう。

図Aにおいて、軍は四個師団と空軍に組織され、すべてが合同総司令部に付属し、直接国防省に対して責任を負う。国防省は文民内閣の一部であり、規律化された軍を政治権力の下に置くことを象徴している。その後の軍内部での権力闘争の結果、図Bに示す第二の改革が行われた。ここには五師団、二個連隊 (師団の三分の二) で編成の共和国防衛隊という新設部隊、および空軍があり、新設部隊と従来の部隊の間に二元性が認められる。共和国防衛隊は共和国大統領に結び付けられるが、一方で他の五師団は旧来の線に沿って構成されており、総司令本部につながり、それを介して国防省につながっている。指令・統括系統も二元的になっていた。また共和国防衛隊と五師団はアブドゥル＝ラフマーン・アーリフ將軍の指揮下にあり、その他の主要ポストには大統領一族のジュマイラート出身の司令官が就いていた。それゆえ、規律化された軍が安全弁としての血縁ネットワークと共存していた。

図Cと図Dでは、全部で七軍団存在し、その他空軍、陸軍空挺隊、防空隊、地对地ミサイル部隊が示されている。さらに、二個軍団 (6～8師団) で編成の共和国防衛隊と軍産複合体がある。この組織は巨大で、50万人以上の兵士、技術者、労働者で編成されている。司令中枢は二種類あり、兵站および作戦の観点から明らかに二元性がある。七軍団と他の空軍やミサイル隊は垂直に編成され、参謀本部と国防省の下にあるが、大統領の二個軍団は別のチャンネルで大統領府に直接つながっている。この二元性が大統領の秘密のカーテンになる。例えば、1990年8月2日のクウェート侵攻は、ムハンマド・ジャッパール・シャンシャル国防相 (モースル出身の老練将校) と参謀総長ニザール・ハズラジ將軍 (党員) が全く知らないところで行われた。20万人から30万人の労働者と技術者が働く多数の工場、研究室から成る軍産複合体も、大統領府が直接監督する。司令・統制系統は複雑で重複しており、参謀部の他、党軍事務局、国家安全保障局 (諜報と治安を担当)、非公式血縁ネットワークの三つの中枢機能がある。この構造は、大統領に監督、管理、運営上の自由を与えている。